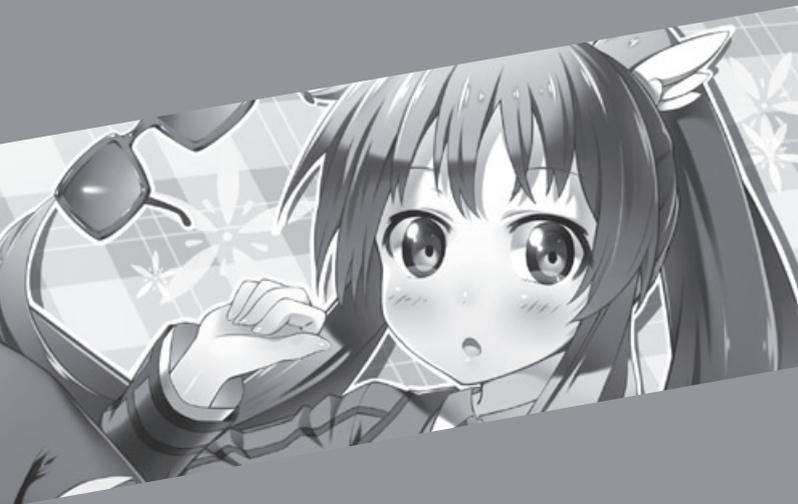

Rewrite ノベルアンソロジー
1

桃山ふみか・たねがしま鉄炮・飯山満

爆裂! アームレスリング

文：桃山ふみか 挿絵：一真



登場人物



かんべ ことり
神戸 小鳥

ガーデニングが得意な、ノリの良い瑚太郎の幼なじみ。

おとどり
鳳 ちはや

パワーあふれる転校生。お節介な瑚太郎が、大嫌い!?



せんり あかね
千里 朱音

学園の魔女とも呼ばれる、オカルト研究会会長。

このはな
此花 ルチア

瑚太郎のクラスの委員長。静流と仲が良い。



なかつ しずる
中津 静流

瑚太郎の後輩の風紀委員。無口だが、感情表現は豊か。

よしの はるひこ
吉野 晴彦

孤独を愛するクールな一匹狼。瑚太郎のよき玩具。



てんのうじ こうたろう
天王寺 瑚太郎

お調子者だが、世話好き。オカリ研活動以外でも、バイトの為に町の噂を集める。

イラスト：一真・ころ・館川まこ

カバーデザイン：上田デザイン室

このアンソロジーに収録された作品は全て、Key制作のアドベンチャーゲーム「Rewrite」をベースに、それぞれの作者が自由な発想、解釈を加え構成したものです。「Rewrite」の作品内容に関する公式見解を提示するものではありません。

ぎくり。

「お、思つてまふえん」

否定しようとして、言葉を囁んでしまった。

「まふえん？」

「新種のUMA（未確認生物）だ。この前ゲットしたオカルトネタ」とつきに思いついたデータラメ話を吹聴した。

「初めて聞きました」

俺も初めて聞いた。

「どんな生き物なんでしょうねー」

俺が適当にでつちあげたUMAネタを、ちはやは意外に引つ張つてきた。

完全に俺の話を信じ込んでいる様子だ。

純真なちはやを騙してしまった。

ちよつとだけ罪悪感が湧いた。

……ほんのちよつとだけだけど。

「それは、まあ、あれだ」

「あれですか？」

「うん、あれ」

「あれなんですかー」

「そう、あれあれ」

お互い『あれ』ばかりでまともな会話になってない。

そもそも脱線してばかりで、ちつとも話が進んでいなかった。

「瑚太郎君、本題本題」

横から小鳥が助け舟を出してくれた。

俺はこほん、と咳払いをして、切り出した。

「ちはや、俺にコーチをしてほしい」

「コーチ……？」

きよとん、とした顔のちはや。

「大会には俺が出る」

「えっ、瑚太郎が？」

「で、そのための練習をしたいんだけど、ちはやには練習相手兼アームレスリングのコーチをお願いしたいわけだ」

「私が、ですか……」

「もちろんタダでは言わん。これでどうだ？」

俺はテーブルの前に紙袋の中身をぶちまけた。

煎餅にポテチ、チョコスナック……大量のお菓子がうず高く積みあがる。

「わあ……」

ちはやが大きく息を呑んだ。

目がきらきらと輝いている。

よし、こいつの心をつかむことに成功したようだ。

これらは部屋に来る前に、大量に買い込んだお菓子だった。

いわば、ちはやへの賄賂。

「お、お菓子なんか釣られませんよ……？」

ちはやの目が泳いだ。

まだ俺への怒りが残っているのか、態度が素直じゃない。

「語尾疑問形だぞ」

「釣られま、せんよ……？」

弱々しくつぶやきつつ、ちはやはテーブルの上のお菓子に手を伸ばし、指先をぶるぶると震わせる。

きつと今、ちはやの中で理性と欲望とが激しくぶつかり合い、葛藤を繰り広げているに違いない。

「ううう……」

ちはやはほとんど涙目だ。

よし、あと一押し。

「ほーれ、ほれほれ」

俺は、ちはやの目の前に包み紙に入った煎餅を突きつけた。

ぷらん、ぷらん、と揺らしてやる。

「ううううう……」

体を震わせながら、なんとか耐えているちはや。

ならば――。

「これでどうだ！」

俺は包み紙を破り、煎餅の姿をむき出しにした！

包み紙という障壁を失い、あらわになった煎餅の姿。

これに耐えきれただけの理性を、果たしてちはやは備えているのか？

「かぶっ」

ちはやは身を乗り出して、煎餅にかじりついた。

俺の指先もちよつとかじられた。

ちはやの中での、欲望VS理性の戦いに決着がついたらしい。

「はむはむ……もぐもぐ……」



俺から煎餅をもぎ取ったちはやは美味しそうに食べ始める。

「そういうわけでコーチよろしくな、ちはや」

「もぐ……? もぐぐつ!」

煎餅を食べる動きが途中で止まり、硬直するちはや。

ようやく自分が何をしているのかに気付いたらしい。

「むぐぐぐ〜」

恨めし気に俺をにらみながらも、煎餅を頬張ることは止めないちはやだった。

※

アームレスリング大会は一週間後——正確には今週の日曜日に行われる。

今日が火曜日だから、あと五日しかない。

この短期間で筋力アップは無理があるため、テクニクだけを徹底的に鍛える——という方針だった。

相手は元プロレスラーの怪力男。その仮想対戦相手として、俺はちはやを選んだ。

「じゃあ、行きますよー」

俺とちはやはがちりと手を組み合った。

奪われた記憶

文：たねがしま鉄炮 挿絵：ころ



さすがに興味を覚えたのか、小鳥の質問が妙に具体的になつてきた。

「いや……正確な時期とか、その前後に何があつたかとかは覚えてないけど……でもそれはきつと、宇宙人によつて記憶を消されたからさ！俺はUFOに連れ去られ、宇宙人に人体実験の被験体にされていたんだ!!」

「ふん、バカバカしいな」

いつの間にか、委員長が割つて入つてきていた。

「天王寺瑚太郎、おまえは漫画やアニメの見過ぎだ」

うわ……。

怪獣映画とかに出てくる怪獣の目撃者つて必ずこう言われるけど、まさか自分が言われる立場になるとは思つてもみなかった……。

此花ルチア。ポニーテールと白い手袋がトレードマークの、我がクラスの堅物委員長。

マジメな彼女が、こうした不思議現象に免疫がないのも、そりゃわかることはわかるけれど。「違つて！わかんねーかな、夢つて言つてもぼんやりしたものじゃなくて、すっげーリアルだったんだ！そういう夢を見ること、委員長だつてあるだろ!？」

俺の言葉に、彼女は困つたような顔になる。

「夢がリアルだということ、それが現実にあつたかどうかは別だ」

「だから思い出したんだつて！アブダクティは宇宙人に記憶を消されることが多いんだ!」

「『アブダクティ???』」

小鳥もちはやも委員長も、オウム返しに尋ねてきた。

「UFOにアブダクション、つまり拉致された人のことをアブダクティつていうんだよ!」

「ふう〜くん、何か読めてきたよ」

小鳥がうんうん頷く。

「わかつてくれたか、小鳥!!」

がつしと、俺は唯ひとりの理解者の両肩を抱いた——が。

「わかるよ瑚太郎君。瑚太郎君は飛行機事故で一度死んだ。しかし赤く燃えるボール型UFOが瑚太郎君の遺体を回収した。そのUFOの中には銀色に輝く巨人がいて、こう言った。『えむえむえむななじゅじゅはちせいのんのちゅじんだ』』」

器用に「エコー」つばくしゃべつてみせる。

「いや……多分、それは違うと思うんだが……」

「『きみにおいしんじたいになるのだあ、そしてえ、ちきゅのへいわのために、はたし

きたい。ふあふあふあふあふあ……』」

「いや、働かないから」

冷静にツッコみ、俺は再び力説した。

「いいか？宇宙人はアメリカ政府と密約を交わして、アブダクションを続けているんだ!」

ヤツらは決して、人類の味方ではない!!」

いい加減、うんざりといった顔になる一同だが――。

「あゝゝゝはっはっはっはっはっはっは!!」

その時、黄金バットのな高らかな笑いが、どこからか聞こえてきた。

「何だ何だ?」

泡を食って振り向くと、そこにいたのはUFOみたいな帽子にローブのような服と、何だか年末歌合戦における幸子さんのなスタイルの御仁。

「昨晚のテレビを真に受けた連中が多いんじゃないか……中でもオカ研のお調子者がバカなことを言い始めるんじゃないかと思って来てみれば、予想がぴったり当たったわね!」

「いや、そんなカッコでドヤ顔されても……」

俺は呆れた声を上げる。

誰かと思つてみれば、井上じゃないか。その東スポ的な取材姿勢が俺たちの部活と微妙に競合しあつている、我が校新聞部の名物部長だ。

「広大な宇宙空間を超えてやつて来る宇宙人が、そんな邪悪な心を持つているはずがないじゃない!!」

そういう井上の双眸は、いつもよりもどこか虚ろな気がする。

「そんなことよりもまず、その格好は? 校則違反じゃないか?」

生マジメ委員長が、進み出て尋ねた。

「ふん! そんなこと小さな問題よ! このカッコはオラリオン星人様の教えを伝えるための、コスチュームのようなものよ!」

自信たつぷりの井上の言葉に、俺は聞き返す。

「あのさ……そのオラリオン星人つてのがまず、わからないんだが」

「呆れたわね、そんなことも知らず、オカ研を名乗つているとは!」

井上は両腕を広げ、声を張り上げた。

「オラリオン星人様は、人類の進化を手助けするために地球に降臨されたの! 旧約聖書の内容はオラリオン星人様による地球生命の創造を記したもの。オラリオン星人様は人類を導くためにモーゼ、イエス、ブツダ、マホメットなどの宗教的指導者たちを地球に送り込み、そして今でも地球人の間に紛れ込み、我々を導いてくださっているのよ――!!」

自分の演説に自分で感激し、うるうると涙を流し出す。

ああ……。

俺は何だか頭痛がしてきた。

何だかヤバげな雰囲気。委員長も退いてしまい、これ以上文句を言えないご様子だ。

「あのさあ……最近、宇宙人と神様とを……つちやにしてるヤツが多いけど、それってただの宗教じゃないか?」

と、俺の言葉に井上のまなじりが上がる。

「失礼ね！ オラリオン星人様の科学力は地球のそれより三千年進んでいるのよ！ あんた如きに何がわかるの!？」

「だ……だつてアメリカでは大勢、アブダクションされてるつて言うし。しかもそれは、精神科医が逆行催眠で明らかにしたことなんだ。逆行催眠下では人間はウソをつくことはできない。つまり、科学的根拠があるんだよ!!」

俺の反論に、しかし井上は意外なことを言った。

「そんなことは、わかつてるわよ」

「へ……?」

間抜けに口をあんぐりと開ける俺へと、井上は問いかけてくる。

「あたしが問題にしているのは、オラリオン星人様は悪しき意図でそんなことをしているわけじゃないつていうこと。宇宙人がアメリカ政府と密約を交わしてるだなんて、あんたはどうやって知ったの?」

「え？ そ……それは、テレビで……」

気圧され、ついごによごと小声で返してしまう俺を、彼女は鼻で笑った。

「ほらご覧なさい。マスゴミに扇動された愚民の末路がこれよ!!」

鬼の首でも取ったかの如くに、俺に人差し指を突きつける。



迷走する弾丸

文：飯山満 挿絵：館川まこ



本当に怪我してたらそんな余裕はないと思うけど、とりあえず俺の体力は満タンだ。

「そしてここを狙うと」

ハンドガンの銃口が俺の頭に向いた。そしてまたも、ためらいなく引き金を引くと……。

『ぎやあああああああつ！』

俺（のキャラ）がとんでもない叫び声を上げて倒れ、画面が真っ黒になった。そしてチームチケットのカウン트가減り、再び教室に立っていた。

「何するんですか！」

「このようにヘッドショット。ここを狙えば一発で仕留める事ができるわ」

実践しなくてもいいだろうに。

「ちなみにナイフと日本刀は、面白い特性があるの。銃声が聞こえたらタイミングよくボタンを押してみて。天王寺、ふたりを撃ちなさい」

仲間銃を向けるのは、あんまりいい気分じゃないけど。とりあえず撃つてみると。

「こんな感じ？」

「どうか？」

『ぎやあああああああつ！』

静流と委員長にはじき返された銃弾が俺にヒットすると、またもや絶叫を上げて絶命した。

チケットが減り、教室に蘇生する。急いで会長達の所へ戻った。

「何させるんですか!？」

「ふたりとも、ボタンを強めに押してみなさい」

静流は心臓を一突き、委員長は首をスパッと斬る。もちろん俺の。

『……あああああつ！』

「これも一撃死よ。ちなみにこの死に方は、喉を切られているから声が出せないの。製作者のこだわりが感じられるわ」

いらんこだわりです。

チケットが減ると、またまた俺はみんなの元へ向かう。

「いい加減にしてください。あんなアホなことでチケット三枚も消費してるんですから」

「そろそろ説明も終わりよ。戯れはこのくらいにしておくわ」

よかつた、このままじゃ俺がひとりチケットを消費するところだった。

「あの、これってどうやって使うんです？」

そう言ったちはやが構えているのはリモコンミサイルだ。……当然とかお約束とかか、その照準は俺のほうを向いている。

「えっと、これですかね？」

当然のごとく発射されるミサイル。

「うお！ やめるバカ！ 誰に向けて撃ってるんだ！」

「え？ え？ ちょよ、ちょっと曲がってくださーい！」

そうコントローラーをガチャガチャ弄っていると、さすがリモコンミサイル、急に進行方向が変わった。落ちた先は……みんなが集まっていると真ん中だ。

『『『『『ぎやあああああああつー！』』』』』』

阿鼻叫喚。六人が同時に絶命する声が聞こえる。

チケットが六枚減り、全員が元の教室に戻った。

「おまえ何してんだよ!？」

「だ、だって、わかんなかったんですもん」

「すでに九チケット失ったわけだが、このゲーム、勝機はあるのか？」

委員長の言うとおりだ。まさかゲームの説明中に半分近くのチケットを使うなんて、思っただけじゃなかった。

「大丈夫よ。なんだかんだで、このチームはいいバランスになっているわ」

確かに、近距離の委員長、近中距離の静流、中遠距離の俺、長距離と指示の会長、救護兵の小鳥、火力専門のちはや。なかなかバランスがいい。

「私はみんなから離れて狙撃をしながら、全体的な指示を出すわ。現場での動きは各自に任せよ」

「おお、会長さんんだか本物っぽい！ あたしもがんばって、相手を蜂の巣にしてみせるよ！」

「ずいぶんと暴力的な救護兵だな」

「あたしのは今から、ピカレスクメディックとでも呼んどくれ」

「うお、かつこいい！」

「もちろんかすれ声でね」

そんないつものやり取りをしている間に、静流が教室の入り口に目をやり、サブマシンガンを連射する。おそらく敵が来ていたのだろう。

「ルチャ」

「わかった！」

入り口に銃弾を打ち込み、相手がある場所から動けないように牽制する。その間に委員長が素早く移動した。

静流は急に発砲をやめ、マガジンを引き抜くと地面に落とした。その音が響くと、相手はつられるように顔を出した。

おそらく弾切れしたと思ったのだろう。「反撃しようとしたところを……」。

「はああああああつー！」

『…あ…あ…あああつー！』

委員長の刀が相手の喉を見事すり抜けた。すぐに、相手チームのチケットが一枚減ったのがわかる。

「あと十九体。やれないことはない」

「そうだな。思ったよりも動けるみたいだ、これならいけるかも知れん」
気を張り巡らせたまま、ふたりは今使った武器のチェックをする。

「すげえ……」

「これは、見事ね……」

会長も素直に驚いていて、小鳥もちはやも拍手をしている。つていうかこのふたり、何でもんなにうまいんだよ。

「ああ、そうそう。ちなみに私達の勝利条件は全拠点破壊よ。向こうのチケットを全部無くしても、敵が出ないだけで勝利にはならないわ」

「つまり、ここで敵を待っていても勝ちは無いいということだな」

であれば、やることは決まっている。

「それじゃあ、拠点に向けて出発しようぜ」

全員がコクリとうなずき。俺達は廊下へと足を向けた。

会長は狙撃のため別行動となり、俺達は五人で廊下を歩いていた。

「次の物影……二人いる」





VA文庫

Rewrite ノベルアンソロジー 1

2011年 11月30日 初版第1刷発行

- 著 者 桃山ふみか
たねがしま鉄炮・飯山満
- イラスト 一真・ころ・館川まこ
- 原 作 Key
- 製 作 株式会社パラダイム

発行人：馬場隆博
発行元：株式会社ビジュアルアーツ
〒531-0073
大阪府大阪市北区本庄西2-12-16
VA 第一ビル
TEL 06-6377-3388

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©FUMIKA MOMOYAMA ©TEPPOU TANEGASHIMA ©HASAMA

©VisualArt's/Key

Printed in Japan 2011

VA010



文：小椋正雪・飯山満・桃山ふみか
挿絵：霧生実奈・佐倉りお・ユハズ

キネティックノベル大賞 受賞者も続々参加中!

「静流とのサンマサンド料理対決!」など
3編を収録予定です

Rewrite
リライト

2011年
12月末発売予定!



2
Rewrite
バルファンロジー

VA文庫も 作品募集 始めました!



Illustration: ZEN

◆応募資格

プロアマを問いません。二次創作が好きな方で、小説、もしくは漫画・イラストなどをVA文庫と一緒に作っていく作家さんを募集いたします。

◆募集内容

小説・漫画&イラストの2部門を募集いたします。応募作品の内容は、ゲーム作品を題材にしたもの、もしくは、ライトノベルでの発行を意識したオリジナル作品とします。

原作は、とくに指定いたしません。

各項ごとの、作品の規定は以下になります。

・小説部門

短編でも、長編でも結構です。ただし、最低以下の長さ以上でお願いいたします。1ページを(17行×42文字)として、50ページ以上。テキストデータを、メールにてご応募下さい。紙の出力はご郵送いただけます。テキスト形式のファイルのみ、受け付けます。特定のワープロ形式は不可です。

・漫画&4コマ漫画&イラスト部門

作業工程にかかわらず、必ずデータでご応募下さい。紙原稿の場合も、スキャニングしたデータをお送りください。

漫画は、作品として完成したものを、最低1話以上、お送り下さい。原稿サイズはB4推奨です。完全なデジタル仕上げの場合など、A5以上あれば問題はございません。

メールに添付する場合は、全ページを一つの圧縮ファイルにした状態でお送りください。画質を落としていただいても、大丈夫です。そのときデータ容量が5MBを越える場合はCD-Rなどに作品を入れ、ご郵送下さい。ご郵送の場合は、圧縮は必要ありません。

イラストは、カラー作品を3枚以上、お送り下さい。イラストも、データのみ受け付けます。あわせてカラー漫画も募集いたします。

◆送先

下記のアドレス、住所までお送り下さい。

<http://vabunko.prpage.jp/>

【メールアドレス】※VA文庫サイト情報もご確認ください!

vabunko-2@product.co.jp

【郵送先】※お問い合わせは上記メールアドレスまでお願いします。

〒531-0073 大阪府大阪市北区本庄西2-12-16 VA第一ビル

VA文庫 作品応募係

●ご応募のメールには、以下も忘れずにご記入下さい。

- ・お名前 ・年齢 ・メールアドレス
- ・電話番号 ・ご住所 ・職歴や応募歴 (あれば)

作品選考には1ヶ月ほど、お時間をいただいています。

募集の締め切りはとくにございません。

VA文庫オリジナル第一弾は
サイエンス☆ラブコメディ

だつて
メー
甘すぎるは
すぎる！

お宇^ぢ宙の^お梅^ぢと^お婚^ぢ約^ぢ指^ぢ輪^ぢ

VA文庫13
宮村優 著
終ましろ 画
定価 639円(税込)

好評発売中

七海駆は重傷を負った美少女楓を助けた。
遠い宇宙から来たという楓からの突然の告白！

「宇宙のために、私とお付き合いして下さい！」

垣間見た記憶から秘密を知った駆は、なぜか同居することに。
その小柄な可愛らしさや素直な性格とは裏腹に、
巨大ドリルを武器に闘う警察官なのだといけれど…。